

道元禪師に於ける行道の本質相

——「行持道環」に就て（其一）——

河 村 孝 道

一 道元禪師（一二〇〇—一二五三）の佛法が「只管打坐」を宗旨とし、其宗旨を基底とせる綿密なる行持の展開（清規の實踐）に立つ處より、從來「行の佛法」として規定されていたが、近時宗學研究の上からは此宗教の特相を「信の佛法」として視る可き事が唱導されている。是等は禪師の佛法に參ずる場合、特に禪師の行道論の考察に當つては重要な視點と言う可きである。但し此場合に於ける行・信は各々其れ自體の領域を有つて相待關係に立つものでもなく、或は又、行為的・心理的經驗の事相・内容というが如きものでは勿論ない。即ち是の關係は、例えば『佛性』卷に佛性と衆生とは絶對に相逢せざる事に於て却つて佛性一元の絶對相を表顯せる如くに、いま、行・信の兩者は絶對に相逢う可からざる關係に於てあり、是の絶對に「難相逢」なる事態を指して「行信一如」と言い、斯かる行信論より展開され歸結せしめられた行の本質相が禪師に於ては「行持道環」と言う語に表顯され

る實踐的展開となつたのである。以下、斯様な視點より「行持道環」と把握される禪師の行道（行持）の性格・構造に就て考察を試みたい。

二 孰れの宗教に於ても、其宗旨の實踐的表顯として獨自なる修行形態を有つものである。そして、通常其等の修行の意味する處は「一定の目的を有つた意識的な行爲・動作であり（中略）特に心を鍛え、理想を體驗の上に實現せんとする目的をもつて、組織的に營まれる身體的な行爲・動作に限られる」ものと規定し、實質上、行の根幹を爲すものは「一定の心的境地への到達を目指すもの」とされ、「雜念を拂い、精神的統一をして行を進めてゆくと、澄み透つた心の底に特殊な深い境地が現われてくる。それが鮮明な形で現われた場合に悟りとか神秘體驗とかいわれる」と言う如く見られている。其れは謂者(1)現實より理想へ、衆生より佛へという心地開發を目する直線的に進展する修行形態たる事、即ち發心↓

修行↓菩提↓涅槃へと向う行體驗の進展態という性格を帶びている。従つて(2)行は衆生の現實界と佛界(絶對界)、煩惱と菩提との媒介者の性格というが如くに考えられている。併し是等の行相は、結局する處、自己の恣意・強爲を基とした分別相持的領域に立つ見地であり、従つて其行體驗の様相は直線的に進みゆく手段的價值態という性格構造として考えられている。謂者果上に重點が置かれている。故に斯様な立場に

在つては、如何に現實否定の猛行が爲されようとも、單なる現實否定に終るのみならず常に二元的範疇に飄弄され永遠の未成佛に墮在する惡無限を招來するの外ない。即ち生・佛二元觀は二律背反的に永遠に一、如を將來しえないし、是處には生きいきたる生命を看過した固定的實體觀があり、更には佛境界其ものが衆生界そのものの事實たる實相を看却せる大いなる誤謬が存するからである。然も行道の様相——安心立命の歸趣を是の二見分別に立つ恣意なる自己の心理的境界相と思考する是様な行道觀に對して、生佛一如に立つ本覺思想に根ざす行道修證觀の展開があつた。但し其れは始覺門の反定立としてのものではありえず、例えば「本覺義者、對_二始覺義_一說。以_二始覺者即同_二本覺_一。依_二本覺_一故而有_二不覺_一。依_二不覺_一故說_レ有_二始覺_一。」と説ける如き不覺・始覺と對立的謂ではなく、却つて一切を貫く根源的眞實態そのものとしての本覺の義であつて、其故に斯かる本覺論に出づる行道觀は、是處に

は大乗佛教の基盤たる緣起・無自性・空・如如と表顯される處の衆生及び諸法の存在的本質相に立ち、其處から現實の自己及び諸法を其本來相に解體し、其本然の當處・當相——法のおのづからなるままにはからわれて斯く「いま」にあらしめられている其の大いなる法の儘に隨順するあり方より把握された眞實と言ひ得る。

周知の如く、叡山天台を母胎として發展した日本佛教に於ては、其れが中道實相を其根本とする法華經に淵源する處より思想的に本覺思想と一乘思想を生み出し、加而眞言の大日經的思惟からも本覺思想の胚胎があつて、是等二つの思想が結實して本覺佛教として成立したのが鎌倉佛教であつたのであるが、是様な本覺思想を根底とする處から、各宗の宗旨の實踐たる修行の性格は孰れも「專修的性格」を帶びている。道元禪師の宗教も斯かる本覺思想を背景とした專修的行相を有するものである。但し其れは宗派的對待に於ける旗幟闡明の意味での專修性ではなくして、却つて宗派の出づる分立以前の全一的根源に立つての謂に外ならない。禪師に於て行とは「行持」の意味であり、其性格内容は「行持道環」として指向されている。是事を端的に次の如く示される。

それ修證はひとつにあらずとおもへる、すなはち外道の見なり。佛法には修證これ一等なり。いまも證上の修なるゆえに、初心の辦道すなはち本證の全體なり、かるがゆえに修行の用心をさづく

るにも、修のほかに證をまつおもひなかれとおもふ。直指の本證なるがゆえなるべし。すでに修の證なれば證にきはなく、證の修なれば修にはじめなし。

佛祖の大道、かならず無上の行持あり、道環して斷絶せず、發心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、行持道環なり。このゆえに、みづからの強爲にあらず、佗の強爲にあらず、不會染汚の行持なり。この行持の功德、われを保任し、佗を保任す。

右に於ける「修證一等」「證上の修」「不染汚の行持」等の

語より窺ひ知られる如く、現實的衆生の強爲に於て起こされる目的追求の行爲的なる行を否定し、むしろ其行爲的なるものの起こされる根源を顧み、其根源的なるものとの關りに於て吾々の行ずる修行の意味内容が直線的階梯的形態ではなくして、吾々の一行一行が無限の價值を有つ圓環的に進展する性格を有つた直接的價值態そのものとしての行だと言うのである。修が其儘に證の全體であるという行觀の基盤には、前述せる如き鎌倉佛教が本覺思想を基底として成立している事に依因せる事を豫想している。本覺思想とは一切の存在は餘す處なく證上の存在——本來成佛の當體であるとする絕對一元的立場である。是様な思想は上に觸れた如く大乘佛教を通じて貫する底流としてあるもので、例えば如來藏・眞如佛性思想の展開に於て判つきりと觀られる處で、其結實したものが日本天台を母胎とせる本覺思想の展開であつたのであるが、併

し、斯かる本覺的思惟傾向は聽て種々の弊害を伴ひ、且つ人間の恣意なる現實を肯定する安易性に墮するに至つた。換言すれば、本覺思想の強調は普遍絕對性の中に主體的實存としての生の現實は解消されてしまふという虚無的事態を生ぜしめるものである。道元禪師の叡山に於ける「本來本法性・天然自性身」への大疑團の眞相も畢竟斯かる處に基づくものに外ならなかつた。そして鎌倉佛教諸家の祖師達は孰れも是様な事實に直面し、其事の對決を通して主體的實存の強調に於て其處からの立教開宗をなし、而して又、是處に宗旨の實踐たる修行の「專修的性格」も有つたと言ひ得る。

いま道元禪師に於ては、本覺思想は始覺的立場に對立せられるものでもなく、また天台本覺門の如くに直ちに「凡即佛」と肯うものでもなく、本覺門の基盤に立ちつつ其本覺隨順に生く可く衆生より佛への方向を強調し、其無限絕對相たる佛を實證するものとして此の現實の主體的實存の行を強く主張されるのである。此意味に於て行は佛果に到る始覺的な意味でもなければ、又衆生界と佛界とを結ぶ媒介者の謂のものでもありえず、本證（自己をして斯くあらしむる眞實そのもの）のおのづからなる發動であり、謂者本證が本證を實證する妙修行という性格に於てある。即ち本證を基底とせる修證一等の行道として展開されている。其れは本證を其儘に護持保任する生活實踐の謂であつて、是れを禪師は「不染汚の修證」た

る「行持」と道われている。其意味に於て行とは本證の人格的な働きと言ひ得るのであり、是様な本證の眞實を現實の生活裡に護持保任しゆく無限の相續・隨順を指向するものこそ實に「行持道環」の意味する内容に外ならない。「道環」とは珠の到る處ろ中心點とならざる無き、然も一點の措定（「行」が直ちに全體其もの（「證」）を現成する絕對圓成性、及び其環の始終無き無限性の如く本證受用・行盡の相續の謂である。本證に根ざす不染汚の無限相續行であるからして、其一行一行が無限の絕對的價值を有つ完結態として現成するのである。行道は飽くまでも意識的行爲的經驗の出づる已前の生命の本然相其ものの學びに外ならないと言ひ得る。

三 「行持道環」は本證不染汚を無限相續する行態であつたが、斯く道得される重要な性格の一面に就て述べておきたい。通常には宗教を求むる根源的要因を無常觀と罪惡觀とに形態分類されているが、其形態に従つて言へば禪師の宗教の様相は無常觀を根底としている。是事は其著述の隨處に於て學道の本基を無常徹見の必須なる事を委説せる處よりして明らかである。然し禪師に於て「觀無常」とは單に咏嘆的に又は客觀的に觀想される如き謂のものでは有り得ず、實存主體其ものに根ざす眞理性とも言う可く、即ち吾々の本來の生命の實態が無常其ものであり、斯く本來無常なる自己が無常なる儘に現成せしめられて在る此の生命の如實態を其のあり、

まゝに正受し、其本然性に隨順し其儘を具現する無常現成の隨順行を意味するものとしてあつた。そして是様な無常現成の行を端的に示現したものが「行持道環」に外ならず、斯かる性格を内包している事に留意しなければならぬ。是事は結局する處、行道は恣意なる妥協を許さざる嚴密なる眞實の生活實踐を期するものである可き事を意味する。従つて「觀無常」とは、吾々の生命の根源態との關りに於て有たれる宗教的危機意識に立つと言ふ事であり、本來的なものを礙ゆる恣意的なる現實面との對決を不斷に有している事である。其れは無常なる自己の實態が明らかに視えてくることであり、其處に恣意に涉る自己の現實相が不斷に顧みられると言ふ事である。生命無常の自己と、然も尙其様に無常であり乍らいま・ここに現成し斯くありえている是の自己實存の生命の絕對的事實の凝視より起こされる正念の相續行と、其眞實を看却して恣意に涉る日常的自己への無限の否定的反復行とを指向するものである。

斯くして「行持道環」——行道は、自己をして斯くあらしむる本證の絕對的事實を無限相續する隨順行と、そして其故に顧みられる日常分別的自我の有つ危機性に直面し其れとの對決という形相を帶び、其れに依つて發こされる無限の否定的反復行とを含むものである。其故に禪師は「修をはなれぬ證を染汚せざらしめんがために、佛祖しきりに修行のゆるく

すべからざるををしふ」と示されている。即ち本證の法と始覺の修行と對待する事なく、飽くまでも本證受用の主體的な行を指標するに外ならない。そして、本證を味ます有所得の染汚行そのものの據つて來たる根源が顧みられる處に起こされる本證の自己發動の行として、あくまでも本證受持の謝念の行として展開された處に禪師の行道の特相が存すると言ひ得る。

斯くして是様な行道修證觀の據つて來たる淵源として、次には「修證不染汚」の源流を尋ね、其本源の内容眞義の開明、及び其處からの歴史的展開の跡を辿り、以て道元禪師の行道への連關をみ、其の行持辦道の本質相を闡明ならしめたい。

- 1 衛藤即應博士『宗祖としての道元禪師』・樽林皓堂博士『道元禪の研究』
- 2 岸本英夫博士『宗教現象の諸相』
- 3 前同。
- 4 『起信論』（解釋分）。
- 5 遊龜教授博士『日本佛教の倫理性』（宮本博士編『佛教の根本眞理』所收論稿）。
- 6 『正法眼藏辦道話』卷。
- 7 同『行持』卷。
- 8 『三祖行業記』・『建誓記』。
- 9 同『辦道話』卷。

寄稿されなかつた諸氏の發表題目（三）

堂山禪師と中國禪宗（その一）	清野宗元
梅山和尚の戒法論について	青龍宗二
正法眼藏における發心の意味について	峯岸孝哉
正法眼藏「道得」について	渡邊勝人
傳光錄における永平道元の思想	高橋全隆
虎關師鍊の紙衣騰について	大石守雄
逆修供養と滅罪信仰	五來重
仁和寺藏「叡山寶幢院並文」について	西村岡紹
口傳文獻における山家山外	田村完誓
論争の扱いについて	古田紹欽
佛教史における時代區分の問題	里見泰穩
佛教時間論の性格	五十嵐明實
「妙好人傳」に見られる宗教生活について	
佛教者としての宮澤賢治	
——その社會的實踐をめぐつて	
日本人のインド觀	近津經史
	増原良彦